

京極読書新聞 <第2号>

発行日 平成21年1月16日(金)
京極町生涯学習センター湧学館

大人にはない瑞々しくしなやかな心

湧学館ボランティア 村山功一（むらやま・こういち）

中学生の皆さん、本を読みましょう。

読書の大切さは言うまでもありませんが、特に中学時代の読書体験は、皆さんのこれからの長い人生に大きく影響するでしょう。君たちは大人にはない瑞々しくしなやかな心を持っています。読書を通して得た様々な感動や発見は、この柔らかな心の中にしっかりと吸収され、永く心の底に残るからです。

でも、今まであまり読書をせず、何を読んでいいかわからないという人は、まず国語の教科書の中で、特に感動したり、印象に残ったり、興味を持った作品を、“原典”で読んでみることを薦めます。そこから出発し、同じ作(著)者の別の作品を読んでみた

り、さらに少しずつ範囲を拡げてゆくといいでしょう。その際頼りになるのが図書館(学校・湧学館)です。図書館に足を運び、自分の読みたい本を見つけることも大切です。

中学時代にすぐれた作品(本)に出会うことは、かけがえない青春期の心の糧であると同時に、その後の人生をより良く生きるための心の支えとなるはずで



少し歯ごたえのある小説を読もう!(2)

湧学館司書 新谷 保人（あらや・やすひと）

19世紀のイギリスやアメリカの小説はおもしろい。それは、野球にたとえれば、投手が力いっぱい剛速球を抛り、打者が力いっぱい振り抜いてホームランを打つような昔の野球のようなおもしろさです。心理を読んだり、データを読んだりするのに忙しい今の私たちの世界から見れば、まるで「こども」のような熱血ぶりなのですが、この、いい大人たちが寝食を忘れて「こんな物語、誰にも書けまい!」「今度こそ傑作だ!」と力みかえる姿がなぜか心地良いのです。そんな、私たちの祖先たちが生み出したおもしろい本を何冊か…

(タイトルはちょっとダサいが) 話は超おもしろい「大渦に吞まれて」をいちばん最初に。

◆ ディケンズ「デビッド・カパーフィールド」

普通、こういう時は「二都物語」や「クリスマス・キャロル」などを薦めることが多いのですが、私はひねくれて「デビッド・カパーフィールド」。

◆ エドガー・アラン・ポー「大渦に吞まれて」

タイトルのカッコよさにひかれて、最初に「アッシャー家の崩壊」や詩集「大鴉(おおがらす)」などを手にとってしまうと大変。超難解で、ポーのイメージもずいぶん変わってしまいます。ここは私の言葉を信じて

◆ 石川啄木「一握の砂」

「不来方(こずかた)のお城の草に寝ころびて/空に吸われし/十五の心」石川啄木の生み出した技「風景を情感に包んで提出する」を覚えると、自分の表現力が十倍くらいパワーアップしますよ。ものを書いたりすることが、苦痛ではなく、楽しみになる。

◆ 宮部みゆき「蒲生邸事件」

この小説の舞台となっている昭和11年の「二・二六事件」。たぶん、あなたたちの曾祖父・曾祖母(ひいおじいちゃん、ひいおばあちゃん)なら、若かった時に現場で体験している人もいられるかもしれませんね。この「蒲生邸事件」の主人公・尾崎孝史のように。自分が生まれる前の時代って、全然自分とは関係ないような気がして、なにか苦手なものです。そういう未知の世界へ、タイムスリップという小説でしかできないスーパーな技で連れて行ってくれる宮部みゆきは、ありがたい。

互いの先入観を越えて

—第1回出前図書館アンケート結果より



第1回出前図書館に「京極中学校」を選ばせてもらったのは、私たち湧学館職員の側に、京極中学校図書室やそこを利用する生徒たちの姿を実感したいという想いがあったからです。ステレオタイプに「読書離れ」が語られることの多い現代の中高生。しかし、それは、実際に自分の目で見て実感しない限りは、安易に口にしてはいけない言葉なのではないでしょうか。

出前図書館をやってよかったと思います。当日中学校に行った湧学館メンバーの中には、何年か前にはこの京極中学

校図書室で図書委員をやっていた人から、私みたいに初めて中学校図書室を体験した人間までさまざまですが、それぞれの視点から実感に沿った「京極中学校図書室」の共通認識が生まれた意味はとても大きいのです。

そして、出前図書館後をお願いしていた生徒アンケート。これを集計して出てきた結果は、さらに私たちの「京極中学校図書室」認識を押し進めるものとなりました。アンケートに協力していただいた京極中学校の先生、生徒さんに感謝いたします。

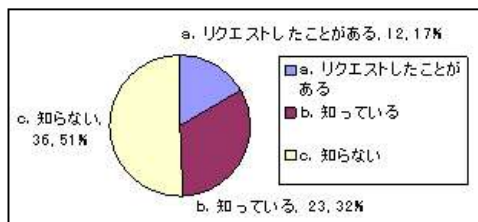
1. 湧学館<図書館>を利用したことがありますか？

「よく利用する」「時々利用する」を合わせると、約8割の中学生が湧学館を利用していると答えています。もっと低い数字（「利用する／しない」で五分五分くらい）を予想していた私たちには望外の喜びでした。湧学館の目標が、「利用している」100%の達成にあることに変わりはありませんが、現時点で「約8割」の高水準をキープできていることが、これからの私たちの試みへの励みとなります。

京極の中学生に巷間伝えられるような「読書離れ」が手ひどく起こっていない理由を、これからの出前図書館などの実践を通じて深く掘り下げたいと考えています。

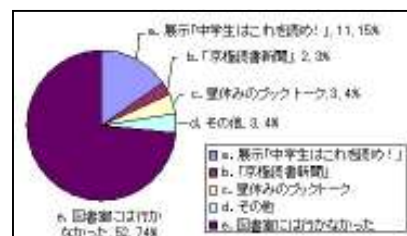


2. 湧学館で本のリクエストを受けつけているのを知っていますか？



「五分五分」はこちらでした。現代の図書館は、利用者の人から出されたリクエストは、可能な限り、購入したり、他の図書館を探するなどして、なんとかその本を利用者に届けることを目標に動きます。リクエストは、側面から、湧学館の蔵書を鍛えることにもつながります。どうか気軽にリクエストしてください。

3. 今回の出前図書館で強く印象に残ったものは何ですか？



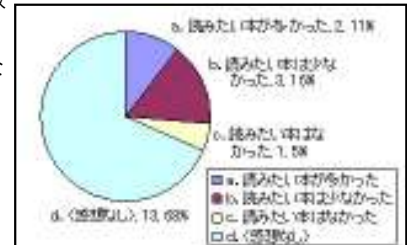
eの「図書室には行かなかった」には「(用事があって)行けなかった」を含みます。約7割の生徒さんが図書室に来なかったのはちょっと残念でした。でも、かなり急に決まった第1回出前図書館でしたし、次回の1月16日第2回では展示内容のバージョンアップも考えていますので、次回こそは来てくださいね。

4. 展示「中学生はこれを読め！」について（「3-e」の回答者を除く19人で）

アンケート結果で目をひいたのは、「3」の答えが「e. 図書室には行かなかった」なのに、「4」にも答えて「b. 読みたい本は少なかった」とか「c. 読みたい本はなかった」などと答えた人が10人以上もいたことです。

「図書館の本なんて、どうせおもしろい本はない」という先入観でしょうか？ でも、ちょっと待ってください。結論を出すには早すぎます。（お若いのに…）おとなになるにつれて、「おもしろい」と感じる心の幅はどんどん広がります。図書館は、いろいろな時代の、いろいろな人たちの感じてきた「おもしろい」を集めて、束ね

て、凝縮してできあがった、「おもしろい」の巨大市場みたいなものなのです。今は口に合わないものも多いかもしれないけれど、これを自分の方から敬遠して捨ててしまうのは、なんともったいない話ですよ。



子ども読書の町京極

湧学館ボランティア 村山功一（むらやま・こういち）

去る12月16日(火)、湧学館の初の試みである「出前図書館」が行われた。

たしかに学校図書館と公共図書館の“連動”は難しい面もあるのだろうが、今回の企画はその可能性と、一つの方向性を考える上で意義ある行事だったと思う。今後さらに研究を深め、いずれは湧学館が学校図書館支援センターとしての役割を担い、子どもたちの読書推進運動に取り組むことが望ましい姿であろう。

さらに、たとえば子ども読書の町京極をスローガンとした町づくり運動へと発展させてゆけば、読書を通じた健全育成への貢献も期待できる。

その牽引役として、湧学館の存在意義は大きい。



コンビニ図書館

湧学館司書 新谷保人（あらや・やすひと）

第1回出前図書館の当日、展示を見ていた京極中学校の先生から「こういうコンビニ図書館はいいね」とのお言葉をいただきました。



先生曰く「湧学館に連れて行っても、蔵書5万冊を前にして生徒はなかなか自分の一冊を選ぶことができないんです。規模が大きすぎて。」「その点、こういうコンビニみたいに、必要最小限で、かつ、古典から新鮮な本までコンパクトに並んでいる」出前図書館はグッドだ、と。

なるほど… こちらも、まだ公共図書館的な頭の固さが残っていて、典拠となるもの(今回ならば「中学生はこれを読め!」)に何となく頼り、「展示」を作ることにこだわってしまうのですが、あまりそういう力の入れ方は必要ないんだということが、今回「出前図書館」に動いてみてとてもよくわかりました。(「中学生はこれを読め!」だって、どんどん改訂を重ねて、今書店に並んでいるラインナップはちがっているのだから…)

要は、2009年の京極中学校にぴったりの「コンビニ図書館」品揃えを実現することと認識し、少し軌道修正することにしました。第2回の1月16日は、その軌道修正バージョンで臨みます。

身近に潜む面白いものを探せ！

湧学館司書 向出絵梨香（むこうで・えりか）

普段は気に留めないような物事の中には、実は結構面白いものが隠れていたりします。今回紹介するのは、身近にありながらも普段あまり注目されないようなもの・ことを集めた本です。

どのページから開いても大丈夫な本ばかりなので、休み時間のちょっとした息抜きにどうぞ！

◆ 内海慶一「ピクトさんの本」

ご存知ですか？ピクトさん。『非常口のマークの人』といえばかりやすいかもしれません。障害物のあるところでは頭を打ち、リフトからは飛び降りて、自分の身を粉にして危険を伝えてくれるピクトさんの姿が詰まった1冊。ピクトさんに注目すると、見慣れた景色も少し違って見えるかも…

類似本に工事現場にいつもいる“あの人”を集めた「街角のオジギビト(とりみき)」という本もあり、こちらもオススメ。

◆ 藤井青銅「あんまりな名前」

「貧乏山」「馬鹿川」は実在し、「南あわじ市市市」は誤植じゃない！世の中に氾濫している「あんまりな名前」を写真やユニークなイラストで紹介。あなたの周りにも、あんまりな名前がきっとあるはず！



▲こちらがピクトさん

◆ 谷ロー刀「バカ日本語辞典」

「薬剤師」を「ヤクザ医師」だと思っていた、「禁固刑」は「金庫刑」だと思っていた、「加齢臭」を「カレー臭」だと思っていた、などなど。くだらないけど意外と役に立つかも…。この本の通りに勘違いしてた人は、正しい意味をこっそりと調べてみてくださいね。

「若い人に贈る読書のすすめ」

「若い人に贈る読書のすすめ」は、成人式・卒業式等新たな人生の一步を踏み出す若い人にぜひ読んでもらいたい本を紹介する運動です。

今年は、2008年本屋大賞や山本周五郎賞を受賞した「ゴールデンスランバー(伊坂幸太郎)」など、各都道府県の読書推進運動協議会から推薦された3冊をもとに24冊が選定されました。ここではその一部を紹介します。

一覧は、読進協ホームページ(<http://www.dokusyo.or.jp/>)または図書館カウンターのリーフレットをご覧ください。

◆ 瀬尾まいこ 他「Re-born はじまりの一步」

わたしの人生、もう一度ここから——。7人の作家が描く、新たな出会いと出発の物語。

◆ 坂東眞理子「大人になる前に身につけてほしいこと」

友だちづきあいのルール、自分を守る知恵など人生の可能性が広がる具体的なアドバイスがいっぱい。

◆ 高田高史「図書館が教えてくれた発想法」

図書館で必要な情報を探し、使いこなすためのコツと発想法。インターネットでの情報検索にも役立ちます。

発行

京極町生涯学習センター湧学館
044-0101 京極町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.cubet.com/>

